

平成27年度第3回千葉市文化芸術振興会議議事録

市民局生活文化スポーツ部文化振興課

1 日 時

平成27年10月8日（木） 午前9時30分～11時30分

2 開催場所

千葉中央コミュニティセンター8階 会議室「千鳥・海鷗」

3 出席者

（委員） 神野委員、早川委員、椎原委員、関委員、高橋委員、林委員、廣崎委員、大澤委員、
竹下委員

（事務局）生活文化スポーツ部長、文化振興課長、文化振興課長補佐、文化振興班主査、
主任主事3名

（その他）（公財）千葉市文化振興財団 職員2名、(株)創建 職員2名

4 議 題

第2次千葉市文化芸術振興計画素案について

5 議事の概要

第2次千葉市文化芸術振興計画素案について意見交換を行った。

6 会議経過

【神野委員長】

オリンピックの話題も色々世間を賑わせていますけれども、オリンピック後の意向がどういうところを目指すのかという理念が共有されていない中でスタジアム、イベントなど様々なことがあって、それがそれぞれの内向きの中で全て決められていくということになってしまっているのは、非常にもったいないいと思います。この文化芸術振興会議の仕事というのは、文化芸術を通して千葉市が将来どのような市になっていくのか、ある種の未来像を見せて体現させてくれる、いつでもそこに返るような理念を実現出来るようなものにしたいと思っています。

本日は、これまでの議論を踏まえて、骨格に少しずつ肉付けをしてきたものが素案として提示されています。こちらについてまたご意見をいただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。では、次第に従いまして議事を進行してまいります。

本日の議題、第2次千葉市文化芸術振興計画素案について、はじめに事務局より説明をお願いしたいと思います。

< 事務局説明 >

【神野委員長】

確認ですけれども、本日は、この素案の文言や内容で、欠けているんじゃないかとか、あるいはこういうニュアンスではないか、というようなアドバイスを委員の皆さんから頂きながら、会議後、委員の皆様がお持ち帰りになって気づいたこと等についても踏まえて事務局に原案を作っていただく。その原案は次回会議で提示され、委員会の承認を得ることが出来た場合、それがパブリックコメントの対象になる、ということによろしいですか。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

ということで、今日はこの素案の内容に関して、委員の皆様からご意見を頂くこととなります。一つ一つやっていくと一日かかってしまうので、皆様からここは気になった、というところをご指摘いただきながら進めたいと思います。

【早川副委員長】

今の説明には、「企業」という言葉がなかなか出てきませんね。もう少し、素案の中に「メセナ」、企業活動と文化芸術活動について書けないかという気がします。有識者インタビューのメンバーを見ても、いわゆる上場企業・大企業の経営者はいませんが、美術館にしたって何にしたって多くは企業経営者が設立していますから。そういう方々のご意見が入れられたらいいなと思います。文化芸術活動の裾野を広げようと言うのに、文化芸術の専門家だけの意見を聞くのは、市の計画としてはちょっといかがかな

という気がします。時間的にもう間に合わなければいいんですが、そういう面も配慮して、幅広く色々な声を聞いてみてください。

【布施文化振興課長】

はい。

【廣崎委員】

この計画には、市民の希望としてアンケートの結果は反映されていると思うんですが、千葉市の独自性があまり感じられない。前回の会議資料にあった現計画関連事業の年次報告書にも、文化芸術が発展するために必要な企画力を伸ばすような事業が全然入っていないんですね。人が集まるにはやはり企画力と宣伝広報力だと思うんですが、そういうものに対しての意思がなかなか感じられません。企画力や様々な横の繋がりをお持ちの方を中心に、それをもっと支援するような予算があってもいいのかなと思います。やりたいことが反映されていて本当にありがたいという市民としての意見はあるんですが、計画期間であるこの先の7年間を通して、現状がどういう風になるのか、ただ事業の入場者が増えて良かったという問題でいいのか、少しその点が疑問だなと思いました。

例えば、芸術文化を支える場というところだと、金沢には24時間営業の市民の芸術村というところがありまして、そこに行けば色々な情報があります。そこへはプロやアマ、沢山の人が集い、情報の交換が出来るんです。学校の空き部屋をそういう施設にすることがとても難しいというのは伺いましたが、例えば、昭和の森のような施設に芸術家を集めて色々なことをやって、そこに行けば楽しいよという場所があれば嬉しいなと思います。千葉の独自性や未来が、今一つ見えませんでした。

【早川副委員長】

先ほど大企業と言ったのは、財政的に厳しい中で、そういうところに資金的協力をしてもらえればという思いがあったからなんです。大きな企業の経営者が、文化芸術というものをどのように考えているか聞いてみるといいし、また、インタビューを通じて、文化芸術を啓発することにも繋がるということを目指しての発言でした。

【神野委員長】

廣崎委員のご意見は、計画の理念としては理解できるけれども、それを実現するための中核的な事業などのイメージが伝わってこない、ということかと思いますが、そのあたりはこの計画に盛り込むことは可能なのでしょうか。

【布施文化振興課長】

この計画書がどちらかというと基本計画に近い部分がありますので、文書表現が中心となります。そのイメージを具体的に伝えるために、こんな事業をやりますよというのが資料4や資料5にございますが、こちらは年度ごとの事業計画となります。それをどこまで本編に文書表現で載せるかということになるかだと思っています。

【大澤委員】

この資料1の2(3)千葉市新基本計画成果指標の評価で、平成23年から26年の実績が美術館以外全ての項目で落ち込んでいますよね。それなのに、この第2次計画でも今までのやり方からあまり変わっていないというイメージがあるんです。今までやっていたことがあまり成果を出していなかったということを踏まえて、この第2次計画で具体的にどうするかだと思います。それは、計画の第5章1「計画推進体制について」の部分に集約されるわけですが、ここには、「文化行政推進会議」や「事業実施にあたっては千葉市文化振興財団と教育振興財団と連携を密にして」という記載がありますが、ここをもう少し色々な形に変えられないかと思います。

【布施文化振興課長】

書き方にもう少し色を付けるか、というような話ですか。

【大澤委員】

今後は何か違った体制が必要だと思うんです。結局、ここに書いてある体制というのはこれまでと同じですよ。「まちは20～30年のサイクルで動いている」とありますが、過去の7年よりこれから先の7年はもっと早く変わっていくと思うんです。そういったときに、7年先に耐えられる内容なのかということです。今後、私たちの予測しないスピードで変化していくということも考えて、7年の計画期間の中でこうだったらこうしようと柔軟に変えられる部分があったらいいのかなと思いました。

【神野委員長】

なかなか難しいところですよ。具体的に書いてしまうと、それに7年間縛られてしまうので、理念的な、変更可能な言い方が出来るものはそうしておくという考え方もあります。要は、この理念を活かせるような体制が、実際にこの枠組みで出来るのかということだと思います。ですので、この体制のところは、プラスアルファ、その他必要な措置を講ずるみたいな書き方になるのでしょうか。

【布施文化振興課長】

従来路線の延長ではないというようなニュアンスで。

【神野委員長】

常に検討していくというようなことは、あってもいいかもしれないですね。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

私自身が一番変わらなくてはいけないと思うのは、おそらく文化行政推進会議だと思うんです。この会議というのは、それほどの推進力を持っていないのではないのでしょうか。

【文化振興課長】

実は今回、この会議のメンバーを改正しました。これまでは、計画の関連事業を実際に行っていない局の主管課が集まって、各自局内の関係課に知らせるという体制でした。今回の改正では、この会議をより実りある柔軟なものにするため、実際に事業を所管する課を主なメンバーとし、体制の強化を図ったところです。また、委員長についても、今まで副市長が委員長でしたが、生活文化スポーツ部長に変更し、先月末に会議を開催したところでございます。この推進会議のメンバーについては、資料4でお示ししています。

【大澤委員】

「市民主体」というのがすごく強調されている中で、それだけでいいのかなという気がします。先ほど早川委員がおっしゃっていたように、資金面で企業に協力してもらったり、もう少し他とも連携出来ないのかなと。それによって企業にも潤いがある可能性があるわけなので、もう少し柔軟に捉えて、手を携えるという意味で、逆に言うと市で抱え込まないように、何か出来ないかと思うんですが。

【布施文化振興課長】

第5章の1(1)の書き方をもう少し検討します。

【椎原委員】

各関連事業の主体というのが各部局にあって、予算措置もそれぞれ違いますよね。そういう現状だと、やはり文化振興課が求心的に施策を進めていくというのはなかなか難しいと思います。

ここには、国の体制と千葉市の体制が書かれていますが、もっと千葉県と千葉市との関係性が計画の中に見えていた方が良くと思います。もし、「千葉文化」「千葉らしさ」と言うのであれば、県との関係を意識すべきだと思います。千葉県の千葉市ということがないと、例えば、成田に海外から観光客が来ても「市」だけの魅力で千葉市に来るとは思えないので、そのあたりを何かしら施策の中で反映しておいた方がいいのかなと思いました。

それと、計画の中では状況の変化と基本施策の関係性が弱いように感じます。確かに、状況はこういう風に変化したと、大きく状況が変化していることが書かれていますが、それがどう各施策に繋がるのかということ意識すべきです。オリンピックがあるから今後色々な予算がつくだろう、と様々な芸術団体さんたちは思っていると思うんですよ。けれども、基本施策からはオリンピック、パラリンピックの気配を感じないので、全体に分かりにくいなと思います。

【布施文化振興課長】

再度、文章の表現を検討します。

【神野委員長】

オリンピックパラリンピックをあえて施策の中には入れずに、重点プロジェクトとして別立てした意図というのは何かあるんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

オリパラ関連の事業をどうするかという議論の中で、基本施策の中に入れるのか検討し、オリパラはある種一過性のものなので、今回は基本施策には入れず別出ししました。とはいえ、重要な事業でその後のレガシーも生じるだろうということは認識しておりますので、「重点プロジェクト」というかたちになっています。

【神野委員長】

この重点プロジェクトについては、今後、それぞれの施策との整合性が考えて立案されていくという考え方でいいですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

はい。椎原委員がおっしゃったように、これだと完全に別枠になっているので、基本施策の中に何等か盛り込めるような表現にするというのも一つの考え方かなと思っています。

【大澤委員】

オリパラに関しても、5章に書いてあるこの推進体制で事業を実施することになるんですか。それとも、別に部署やプロジェクトを作るんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

オリパラの専門セクションは、いずれ出来ると思います。

【大澤委員】

それも、この計画に書かれている体制の一つとして出てくるんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

いえ、文化とは別枠です。そういったときに、行う事業が今回のこの計画で読み込めるような造りにしておかないといけないと思うんですよね。

【大澤委員】

24ページ(2)「重点プロジェクトの施策展開」には、美術館と車椅子スポーツのことが書いてありますね。車椅子スポーツって、何か急に出て来たような感じがします。その後は普通の言葉が書いてある感じなんですけれども、よくわからない。

【布施文化振興課長】

美術館については、東京都から連携などを検討しませんかという話があるので、このように書くことが出来ました。25ページにある2つについては、具体的にまだ何も決まっていないので、このような文章での表現になったというのが正直なところです。

【神野委員長】

色々な可能性があるもののうち、具体的なイメージが示せるものを例として出しているということですね。

【布施文化振興課長】

はい。千葉市は開催都市として具体的に何をやるのかということは、これから色々と検討していくので、美術館のようなところまで、今の時点では考えていません。

【神野委員長】

いきなり持って来たものではなく、既にあるものについて書かれているということですね。

【布施文化振興課長】

逆に、美術館の部分のトーンを落として他と合わせるか、という検討になると思います。

【早川副委員長】

重点プロジェクトで一番大切なのは美術館ですよ、イメージが湧きますから。他はまだこれからだということでもよろしいですか。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

椎原委員の先ほどのご意見に戻りたいと思うんですが、所管課の違う事業を、会議の場で全体としてみて整合性を取っていくというのが現状ですが、これを一つにまとめることは出来ないんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

ないと思います。それぞれのセクションで実施しているものは、文化事業として行っているのではないので、その予算を統合するというのは無理です。そういったセクションであっても、文化事業として実施してもらえるような求心力のある予算化をした方がよいというのであれば、それはまた話が別で、文化振興課がある程度まとまった予算を取って、それを各課に配分するという手法はありえると思います。

【神野委員長】

もう一つ、県と市の関係ですけれども、県も「千葉文化」として千葉らしさを確立しようとしている中で、県と市の役割分担のようなことがあったり、効率よくうまくそれを見せていったりということも必要じゃないかということですが、そのあたりの摺合せは県と市で実際に行われているんでしょうか。

【布施文化振興課長】

現状、年に一回の会議がある程度で、それ以外に関わりはありません。ただ、オリパラに向けては今

月末、県内の市のオリパラに関係のあるセクションの職員を集めて、文化なら文化、福祉なら福祉という分野別の初会合が開かれる予定です。今後、オリパラを契機に今よりも関係が密になるとは思います。普通であれば、国の計画、県の計画を受けて市の計画という3階層ですが、県からは特段、補助金・交付金もないので、国の位置づけ・市の位置づけというように整理させていただきました。

【早川副委員長】

千葉県の担当部署はどこですか。

【布施文化振興課長】

県民生活・文化課です。

【竹下委員】

政令市は県に頼らない独自の施策を進めようとするもので、今のお話のように、県と市がどうしたら協力することでより大きな力を発揮できるかとなると、日ごろの意思疎通を重ねていくしかないと思います。政令市というのは一般的にそういうものだとは私は理解しています。でも、オリンピックパラリンピックというのは一つの重要な契機になると思うので、東京都だけではなく県とも協力しながら少ない予算を効率的に働かせて、県市全体をアピールしていくことは非常に重要だと思います。ですから、是非、千葉市から県に働きかけて、県と市共同で効率的な宣伝力を持つことを目指していただきたいです。

私は今年、3回目の国勢調査の調査員を務め、百数世帯を担当しました。世帯の構成をみると、一人世帯・二人世帯が併せて全体の3分の2を占めていて、これには愕然としました。つまり、世帯が急速に縮小していて、7年後にはどのような世帯状況になるのか、という恐れを感じました。それを文化芸術施策にどう反映させていくのかと考えるときには、SNSやコミュニティのあり方がますます注目されると思います。人々の集う場ということをもっと強調して計画に謳うべきだと思いました。そこに集えば「明日も元気にやっぺいこう」という明るい感情が湧いてくるような場の設定が、芸術文化にとってとても大事なことのひとつだと思います。そういう場の提供について、もっとこの施策の中で強調していただろうと思います。

行政の計画は、総合的ということが大前提ですが、この内容からは千葉の独自性が感じられないのは私も同感です。やはり、千葉市としてこれを頑張るといものが1つ、2つは必要ではないでしょうか。先日、美術館の今後の戦略について、個人的にお話を伺いました。美術館は浮世絵など非常に独自なものを持っているので、戦略についても明確に言いやすいんでしょうけれども、千葉市としてもこの施策の中に、これは強調して実施していきたいという特化したものが必要だと感じます。

【椎原委員】

劇場法の視点がすごく弱いと感じました。既存の劇場が独自の「企画」をすることで、単なる施設としてでなく、一つの創造的な機関として活性化していく方向性が劇場法では明文化されていますので、それにのっとった予算配分をして頑張ってもらいたいと思いました。

【丸島生活文化スポーツ部長】

はい。劇場法には「劇場とかホールがもっと特色を出して地域を盛り上げなさい」ということがあるので、その部分に関する記述がこの計画に足りないということですね。

【椎原委員】

いわゆる全国にある公共ホールというのが死に体になっているものが多い中、劇場がもっと主体性を持って自主的に活動することを促すために、国においては相当な予算措置がなされています。千葉市のホールはそこが弱いので、市として、戦略的にやっていく方向性を記載すべきだと思います。

【神野委員長】

千葉市は、「劇場法をこう捉え、こんなことをします」という理念が示されているといいということですね。

【椎原委員】

人材のテコ入れが必要になってきますよね。

【廣崎委員】

それが一番必要だと思います。

【丸島生活文化スポーツ部長】

そこまでの話は、民間運営というところもあるのではなかなか計画に入れにくいですね。劇場ごとに独自のやり方でもっと活性化するようなことは書けると思います。

【高橋委員】

16ページ2「事業展開にあたっての基本姿勢」の「文化を遊ぶ」で、「を遊ぶ」という表現はあまり見ない表現だったので「文化と」でいいと思うんですが、あえて「を」を使ったんでしょうか。別に批判するわけではなくて、これはこれでいい表現かなと思うんですが、気になりました。

【神野委員長】

私もここは気になりました。文化がすごく固定的に捉えられているという側面が今のご指摘にもあるんですが、やはり文化というのは変わっていくもの、創っていくものというときに、「を」だと固定化されてしまうのが気になります。皆様から表現についてご提案があればお願いします。

【高橋委員】

「文化を遊ぶ」とはどういうことなのでしょう。

【布施文化振興課長】

今まで市の施策はどちらかというと、オーケストラや劇団を呼んでお客さんを増やそうというものが多

かったけれども、これからは、実際活動する、演じる、描くというように自ら動く市民を増やす方に軸足を動かしたいということがあります。それを具体的にどうしていくのかという中で、「文化芸術」という固く、より専門性が求められるような言葉のイメージを崩そう、そして、もっと短く多くの方にとって分かり易いイメージの言葉を考えました。他にいい言葉のご提案があれば、置き換えたいと思います。

【早川副委員長】

出来るだけ文章を短くしてくれないと、高齢者は分からないですよ。なるべく短く、センテンスを切って書いてもらえると非常に分かりやすい。

それと先ほど、ホールが死に体になっているという話がありましたが、私が聞いている限り千葉市のホールはそんなに悪くないような気がするんですが。

【神野委員長】

全国を見たときにそういう傾向が強いということで、椎原委員の意図は千葉市のホールももっと頑張れるよね、ということだと思います。劇場法の中で語られているホールのイメージというのは、旧来のホールの運営を更に主体的に、お客さんを待っているというよりはもっと自ら出ていくようなものなので、その部分をもう少し打ち出してもいいんじゃないかということですね。

【早川副委員長】

市のホールは、そういうスタンスではないんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

どちらかという、今までは鑑賞型の事業をして、お客様に来てもらうようなところがありました。それだけでなく、活性化してもっと色々なホールの使い方が出来るし、それに対して国もお金を出しますよ、という趣旨で劇場法ができたので、それをもっと活用するような計画にしたらどうかというご意見だと思います。

【大澤委員】

そうすると、国からお金が下りるんですか。

【早川副委員長】

今は全て指定管理で、市の直営ホールはないですよ。

【丸島生活文化スポーツ部長】

はい。

【早川副委員長】

古い施設は別として、稼働率も悪くないですよ。満足な数字ではないけれども、うまく回っているという印象なんですけれども。

【神野委員長】

その指定管理に関して、こういう方向のことも取り組みなさいということは市から伝えられるようにする。そのあたりのところは、この計画にあっていいんじゃないかということですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

もっと施設が活性化するような使い方をしたらどうかということについて、計画の中にうまく取り込めたいということだと思います。なかなか表現の仕方は難しいですが。

【神野委員長】

計画の中で、劇場法の理念がもう少し前に出てきてもいいのではないかと、ということだと思います。

【丸島生活文化スポーツ部長】

はい。

【関委員】

全体的に、時代に合わせているなという印象が強くて、そこが一番引っかかります。未来は誰にも分かりませんが、もう少し未来についてどう考えていこうとしているのかということを入れた方がいいと感じました。例えば、最初の趣旨のところ、スマートフォンとかクールジャパンについて書くことは構わないんですけど、今後、スマートフォンがなくなるかもしれないし、クールジャパンだって5年後には下火になっている可能性は十分にありますよね。今という時代をきちんと捉えて、そのうえで新たな未来について考えましょう、というようなことが入らないと、結局時代に取り遅れてしまうのではないかと思います。オリンピックのところでは、未来という言葉が入っているんですけど、それ以外ではどんな世界を想像しているのかという記述が少ないなと感じました。

それと、先ほどから東京オリンピックパラリンピックの話が出ていますが、それこそ千葉の独自性がないと思うんです。例えば、単純な距離の問題もあると思いますが、オリンピックパラリンピックの捉え方というのは、千葉と鹿児島とは違うわけですね。じゃあ、埼玉や神奈川とはどう違うんだろうかということ。この東京オリンピックパラリンピックの捉え方も、東京に近いから乗っかってみようという印象を受けてしまって、それを独自性にするならいいんですけども、どうなのかなと思いました。

【神野委員長】

先ほどの大澤委員、廣崎委員のご指摘を繋げて考えてみれば、その理念が目に見えるよう、事業のようなかたちで記載される部分があってもいいのかなという気がします。例えば、「未来に向けて取り組んでいく」ことについての理念だけが計画の中にあって、何となく今までやってきたものがそれに基づいていますよという作文になってしまっているという印象がとても大きい。先ほど椎原委員がおっしゃっていたように、今バブル的な状況になっているところがありますが、持続性という観点でみると非常に危険なものだと私は思っています。東京オリンピックの時もそういう傾向は確かにありましたけれども、その時は人口も増えていて、経済が拡大していたんですね。ところが、これから先はそれらが縮小して

いく中で、ドーピングのようなお金をバンと投じられてあとは焼け野原しか残らないんじゃないかというのが、僕ら芸術を生業にしているものが一番危惧しているところです。やはり、一つのモデルを示して、実際にやってその後に繋がっていくような中核的事業を出して推進するということはあってもいいんじゃないか、ないとまずいかもしいかなということ、今日の議論を聞いて思いました。これは行政的にはなかなか難しいんでしょうけれども、理念としてそういうことを目指す、実現を目指すとかそういう形で、一つのきっかけになるような文言やイメージをもてる記載があってもいい気がします。いかがでしょうか。

【大澤委員】

賛成です。

【神野委員長】

先ほどの竹下委員のお話に世帯の変化ということがありました。私は、今年、URと一緒に団地の中のあまり活発に使われない集会所を、アートの視点で多世代が交流するスペースにどう変えられるかということに取り組んできました。竹下委員が危惧されるように、本当に単身世帯が増えていて、今後もっとも増えていくと思います。この取り組みを通して、一軒家から転居される高齢の方がこんなにも多いのかということも学んだりしました。いわば千葉市のある種の未来像をそこに見ているわけですが、そういうことも視野に入れながら、どうやって人の繋がりをつくっていくかというところで、文化芸術によってそれをつくれる、ということをものすごく感じました。そのあたりを、どのような文言でこの計画に入れられるか。若い人たちを高齢者がサポートすることで繋がりができてくることもあるでしょうし、そのあたりの視点も文化芸術に関わる中で語れるかもしれないですね。どこかにそれも盛り込めないかという気がします。

メリハリというご指摘もあったと思いますが、それは先ほど私をご提案させていただいたように、中核的な事業を通してこういうことを目指しているということが見えるようなものがあると市民の方々の普段の活動を捉え直すことが出来るような気がします。

【早川副委員長】

そもそも、この計画を何の為に作るのかということですよ。

【林委員】

この計画を読んで、7年後の姿がどうなるのか分かりにくい、見えないということは、私も感じました。何がよく分からないかというのと、“文化芸術”というのが何を対象にしているのかだと思います。それぞれの分野でどのようにっていくのか、ということが全然見えない。基本施策を見ると、文化芸術の裾野を広げる、人を育てる、ということが記載されていますが、例えば、音楽の分野ではこうなる、演劇の分野はこうなるといった着地点みたいなものが全然見えないんです。おそらく、そういう計画なんだろうけれども、抽象的に「支援する」、「発信する」という記載に留まっている。市の各部署が、何の分野でどこを目指して事業をやっていくのかというイメージがあまり出来ていない中で、今までやっている事業を多少アレンジしながら実施していくという実態なのかなという気がします。ですから、分野

別に「どの着地点を目指して進んでいく」というような記載が必要だと感じました。

【早川副委員長】

この計画は、経済関係の計画とは違います。基本施策1「文化芸術に親しむ市民の裾野を広げる」というところで、結果何十万人にする、そのうち絵を描く人は何人、バレエをやる人は何人と決めて目標を達成すればいいというのとは違うんです。裾野を広げるために色々な具体的施策を展開すればいい。結果的に結果の数値が減ってしまったら、そのときにどうするかを考えればいいと思います。そういう計画なので、先は見えないと思います。

戦後、昭和20年代の千葉県の統計を見ると、第1次、2次、3次産業のうち、第2次産業の割合は75%です。しかし、これは、ほとんど醸造業、醤油とお酒とみりんです。その時代からは大きく変化していますので、計画にもありますように、2、30年で状況は変わっていきますから、文化芸術分野でこうなっていくという未来予想は難しいような気がします。

【神野委員長】

私の立場から言うと、ジャンルというものの自体、網羅的にやるのか重点的にやるのか、あるいはジャンルそのものが妥当なのか、そういうジャンル分けでいいのかということもありますので、なかなか難しい時代ということがあります。やはり、全体としてこういう方向を目指していくということにせざるをえないところがある。例えば、千葉市が「バレエのまち」ということを謳っているのであれば別ですが、千葉市は残念ながらそこを絞れない状況にあります。その中で、市民がもっと主体的にそういうものに関わっていく状況をつくるのが大事だ、ということをお今回は非常に強調していて、文言だけ見ていくとあまり変わらない、行政の作文だと見えるかもしれないんですけども、私は前回よりは結構変わっているなと思うんです。「鑑賞型から参加型へ」ということもそうですし、文言の一つ一つも、前の計画は「総話的に書いてあるでしょ」という感じにしか見えなくもなかったものが、事務局も理解したうえで新しい計画を書こうという部分が結構見て取れます。やはり、文化芸術は具体的な体験が中心になるので、文言では伝わってこないという部分で、当然、色々ご不満はあると思います。けれども、そこで具体的に書いてしまうと基本計画ではなくなってしまうということもあるので、このあたりの階層で方向性を考えていただいて、理念を具体化出来るものを示していきましょうということくらいは言ってもいいような気がします。そうしないと、前回の7年と同じことが繰り返されてしまうかもしれないという危惧はありますので。

【関委員】

この資料1、2(3)の千葉市基本計画成果指標で、なぜ29年目標、33年と目標を2つ掲げるのかというところが分からないんですが。右肩上がりの2つの目標を設定してしまうと、単純な右肩上がりを目標にしている文化施策なのかという印象を抱いてしまうと思います。極論を言えば、別に下がってもいいですよ。文化芸術に携わって普遍的な理念を持って活動していれば、どうもだめらしいという時期もあれば、いいらしいというような時期もあると思うんです。これは何の必要性から2つ掲げるのでしょうか。

【布施文化振興課長】

総合計画である千葉市新基本計画というものがあまして、その実施計画というのは3年計画で、3年ごとに見直しを図っていくことになっています。この新基本計画の中に文化芸術施策という柱があるので、成果指標を掲げて、3年ごとに市民アンケート調査を実施してどう変わってきたか成果を把握することになっています。そのようなことから、3年ごとに目標を設定せざるをえないのが実状です。

【関委員】

3年というより6年、6年で25%上げるという捉え方でいいんですね。

【丸島生活文化スポーツ部長】

市の新基本計画は10年計画なので、3年3年4年というスパンで、それぞれの間ごとの目標値を示します。関委員のおっしゃるように、文化にとって果たしてこれが適切な目標値なのかということは確かにあると思います。

【神野委員長】

国の目標に合わせて、市も設定したんですか。

【丸島生活文化スポーツ部長】

国の目標とは別です。

【神野委員長】

目標数値が強いメッセージになると、それを実現するために本質的ではないことをやっていくということも起きると思います。おそらく、今回の計画の中身を実現するには、時間がかかります。市民の意識を変えて、市民が主体的に参加することが当たり前になって、その先に数値として成果が出てくる。そうすると、こんなに短期で数値に変化が現れることはおそくないですね。

【大澤委員】

そうですね。それで達成されなかったからじゃあどうする、となってしまうとせっかく積み上げたものが全部崩される可能性もありますよね。

【神野委員長】

これについては、表記を工夫していただいた方がいいかもしれませんね。

【早川副委員長】

いわゆる「鑑賞型から参加型」というのは明らかに私でも読み取れますから、今の計画と比べると中身はかなり変わっているという実感は持っています。ただ、目標の数字はあってもなくてもいいんです。この基本施策に基づいて、各所管が事業計画を立てるわけですから。3年経って成果が出なかったら、もう少し頑張れと指摘すればいいので、目標数値を設定してノルマ化すると数字をつくってしまうよう

なことにもなりかねない。やっていけばいいんだということではいけないと思いますから、目安というのはあってもいいと思います。事実、お花やお茶の先生などは減っていますよね。減った人数がうまい具合に他の分野に回っていけばいいんですが。

【神野委員長】

人口も減っていて、雇用の問題からしても労働の長時間化で自由な時間が奪われるようになってきていますので、余暇に充てる時間が減ってきている中で、こういう数値的な目標を目指せというのは相当矛盾しているということもあると思います。

【丸島生活文化スポーツ部長】

成果指標は、目安という捉え方がいいのかもしれないですね。

【神野委員長】

今後、数値的なものと質的なものを両方とも総合的に評価できる仕組みをつくりたい、その辺も見えるようにこういう数値が出ている、ということですね。

【早川副委員長】

私は、高齢化が進む市内の過疎地、お店が全然成り立たないような所に住んでいますが、一方、幕張地区はどんどん人口が増えていますね。同じ市内でそのような現象が起きているということは、やっぱり考えないといけないと思います。私の住んでいる所と幕張の事情は全然違いますから。

【丸島生活文化スポーツ部長】

先ほど高橋委員がおっしゃった「文化を遊ぶ」、このフレーズが私も気になっていますので、何か他にご提案があればお願いしたいと思います。

【関委員】

おそらく、基本姿勢②が名詞2つなので、①「文化を遊ぶ」と②「共感と寛容」は、相性が悪いように思います。例えば、①「学ぶと遊ぶ」②「共感と寛容」にするならまだ分かります。「寛容」というのが、分かりづらい日本語だなと思ったりしますが、「文化を遊ぶ」は私も反対ですね。

【高橋委員】

“もてあそぶ”みたいな感じですね。

【早川副委員長】

考えた人の「気取ったような新しい表現を」という意図は十分に感じられます。

【竹下委員】

「文化芸術というのはハードルが低いんだよ、だから市民の皆さんもっと参加して」というイメージは伝わりますので、私は嫌いではないです。「遊ぶ」というのはよく考えたなという印象でした。「寛容」はやはりよく分かりません。

【早川副委員長】

「を」というのは、普通だったら「文化と遊ぶ」、「と」になりますよね。よく考えた表現だなと思いました。

【高橋委員】

余談ですが、先週、パラソルギャラリー取材しました。JR千葉駅前にパラソルを広げて、その下で芸術家が自分の作品を見てもらうという事業が、今年で16回目を迎え、過去最多160組が出品しました。出品者にインタビューをしたところ、「定年退職後に公民館などで制作したミニチュア作品を是非見てもらいたいから参加した」とおっしゃっていました。定年退職した方は、創作意欲がすごくあるので、そういう方たちに対して支援していただけたらと感じます。

【神野委員長】

この文言について、他にご意見はございますか。

【布施文化振興課長】

私たちとしては、専門特化してプロフェッショナルの世界に行くのではなく、アマチュア、あるいは遊びから入っていい、というイメージを伝えたいと思い、このような表現にしました。

【早川副委員長】

「寛容」は分かりにくいですね。

【布施文化振興課長】

自分のテリトリーを決めがちな世の中の風潮がある中で、他者を排除せずに受け入れましょうというイメージで「寛容」を使っております。

【神野委員長】

表現活動というのは尖った強さを持っていて、それに対して、そんなものは嫌だと言ってしまったら、対話は始まらないし、自分の考えが他の人との関わりの中で変化していくこともないわけです。芸術表現に向き合うということは、強いメッセージ、表現をどう受け止めるのかということなので、まず寛容でなければ人も表現も受け止められません。寛容性をもつと、多世代が共に生きやすくなるということにも繋がっていくということはとても重要視されていますね。この言葉は、有識者インタビューをした方たちがおっしゃったんでしょうか。

【布施文化振興課長】

はい。多くの方がおっしゃっていたので、キーワード的に用いました。

【関委員】

理念としてはものすごく分かります。

【神野委員長】

右側の説明にそれがちゃんと反映されていないですね。

【布施文化振興課長】

表現の仕方を再度検討します。

【関委員】

「敷居を低く」の「低く」は、「無くす」だといけませんか。なくせばいいじゃないですか、と思うんですが。

【神野委員長】

「無くす」でも問題ないんじゃないでしょうか。

右と左の整合性と「文化を遊ぶ」の部分は、皆さんに次回までに周りの方にご意見を伺うなどして考えておいていただいてもいいのかなという気がしますね。

【竹下委員】

一昨日、美術館の方に、「オリンピックパラリンピックを念頭に置くと、これからの課題は何か」と尋ねたら、「絵に関する標記の多言語化です。当然、外国からお客様がいらっしゃれば、英語、韓国語、中国語などでの記載が必要になると思うので、作品解説などを訳してくれる人材が必要だけれども、そこまでとても今は手が回らないんです。」とおっしゃっていました。これは美術館に限りませんけれども、我々が、これから取り組む課題として、外国の方でも理解できる内容の表記や解説を加えていくということがあると思いますので、そういった方面にもこれから心遣いをお願いしたいと思います。

【布施文化振興課長】

多言語化対応につきましては、美術館でいうと、やっぱり単館では厳しいという現状があるようです。Wi-Fiなどを使いながら多言語解説が出来るようなかたちを研究しなければいけないということで、東京都が中心になって動き始めています。ただ、美術館以外については、通訳等もそうなんですけど、これからオリパラに向けた課題として対応について考えていくことになると思います。

【早川副委員長】

美術館は進んでいるということですね。

基本的に絵や書を見に来るわけですから、言葉はそこまで関係ないかもしれませんが。実は、ひと月前、

千葉市美術館で中国の画家4人が作品展を開催しました。4人とも日本語が全く話せない中で、日本人のお客様が来るといことで城西国際大学の中国人留学生が案内などを手伝ってくれて、一週間の展示会は無事に終了した、ということがありました。

【布施文化振興課長】

通訳をするにしても、やはり自分の地域や国の文化・伝統を知らないと正確に訳せないということがあるので、それらを背景として捉えるということが必要になってくると思っています。そのあたりは、文言として入れられるか具体的な段階で考えていきたいと思っています。

【神野委員長】

「おもてなし」と書いてあるので、それについて、もうちょっと広がりのある中身を感じられたら良いですね。

【布施文化振興課長】

はい。

【神野委員長】

長時間にわたってご議論いただき、本当にありがとうございました。やはり、基本施策として目指している全体の方向性が打ち出されていることが大事だと思いますね。その点について、「鑑賞から参加型」という方向が打ち出されたということは、非常に大きな変化です。あとは、総話的になっていた文言について、中身がどうなのかということの皆様感じていたところがありました。やはり、オリンピックを契機にして日本全体がどこに向かっていくのかということもあるので、千葉もそれをうまく利用して、計画の中で、ある方向性が見えてくるような事業推進みたいなことを視野に入れていくということもほのめかすことが出来たらいいのではないのでしょうか。加えて、色々な地域の課題や細かなテクニカルな問題についてご指摘があったと思いますので、それらを持って帰って調整していただくというかたちで、次回11月18日に、原案について検討するというところでよろしいでしょうか。

以上で、本日は終了とし、事務局にお返しします。